

References

- CRAWFORD, D. J. 1985. Electrophoretic data and plant speciation. *Systematic Botany* 10: 405-416.
- GOTTLIEB, L. D. 1981. electrophoretic evidence and plant populations. *Prog. Phytochem.* 7: 1-46.
- , 1982. Conservation and duplication of isozymes in plants. *Science* 216: 373-380.
- HAMRICK, J. L. and Godt, M. J. 1989. Allozyme diversity in plant species. *In*: Brown, A. H. D. et al. (Eds.): *Population Genetics and Germplasm Resources in Crop Management*, 44-64. Sinaur, Massachusetts.
- , Linhart, Y. B. and Mitton, J. B. 1979. Relationships between life history characteristics and electrophoretically-detectable genetic variation in plants. *Annu. Rev. Ecol. Syst.* 10: 173-200.
- LOVELESS, M. D. and Hamrick, J. L. 1984. Ecological determinants of genetic structure in plant populations. *Annu. Rev. Ecol. Syst.* 15: 65-95.
- NEI, M. 1972. Genetic distance between populations. *Amer. Nat.* 105: 385-398.
- , 1973. Analysis of gene diversity in subdivided populations. *Proc. Nat. Acad. Sci. USA* 70: 3321-3323.
- NOSHIRO, S. 1984. Variations of *Quercus mongolica* var. *undulatifolia* and var. *grosseserrata* on Mt. Makihata, Central Japan. *J. Phytogeo.* Tax. 32: 116-126 (in Japanese with English summary).
- Schnabel, A. and HAMRICK, J. L. 1990. Comparative analysis of population genetic structure in *Quercus macrocarpa* and *Q. gambelii* (Fagaceae). *Systematic Botany* 15: 240-251.
- SLATKIN, M. 1985. Gene flow in natural populations. *Ann.Rev.Ecol.Syst.* 16: 393-430.
- SWOFFORD, D. L. and Selander, R. K. 1981. BIOSYS-1. University of Illinois, Urbana.
- TSUMURA, Y., TOMARU, N., TOYAMA, Y., NAIEM, M. and OHBA, K. 1990. Methods for isozyme electrophoresis. *Rep. Agr. Exp. Forrest Tsukuba Univ.* 6: 63-95 (in Japanese).

摘 要

ミズナラとミヤマナラの遺伝的な近縁度、ミズナラとミヤマナラ集団内の遺伝的多様性の程度の推定をアロザイムを用いて行った。ミズナラとミヤマナラを合わせた集団全体にはかなりの遺伝的分化が認められたが、ミヤマナラとミズナラの根井の遺伝距離は0.011と小さかった。これらの事は、ミヤマナラの集団はミズナラの集団からある程度の遺伝子の流入を受け、酵素レベルでの分化が阻害されていることを示している。ミヤマナラは単系統であることが一応支持されたが、最終的な結論には、より多くのデータが必要である。

ミズナラとミヤマナラの集団内の遺伝的多様性(平均ヘテロ接合体頻度)は0.16から0.24と比較的高く、他の風媒の樹種の報告と同程度であった。

(Received July 15, 1991)

○ 堀田 満・井上民二・小山直樹(編) 赤道直下, 森と火山の島 スマトラの自然と人々 八坂書房(〒101 東京都千代田区神田神保町1-56), 1992年3月25日発行。B5判。175頁。定価4,800円。

これは、1980~1989年の10年間に及ぶ編者らを中心としたスマトラの自然研究の成果の一般向けの解説書である。本書は、1, スマトラ自然研究, 2, 森と植物達, 3, 多彩な昆虫達の生活, 4, サル達の暮らし, 5, 創り出された環境の4章から成り、巻末には文献解題・術語解説・写真と図のデータがある。本文中に随所にカラー写真や白黒写真がはさまれていて理解を助けてくれる

植物関係は 第2章 堀田満氏の「まだ知られないスマトラの植物達」と甲山隆司氏の「動いているスマトラの森」の記事がある。スマトラといえばすぐ思い出すのはラフレシアだが、第2章はラフレシア物語から始まり、サトイモ科の新属フルタドア発見のいきさつ、スマトラに多い溪流型植物の話、葉が1生に1枚しかでない石灰岩植物のモノフィレア、ツリフネソウ属15種の生育地や交配様式の観察など、読み易い文章で語られている。海外学術の成果としてもユニークな試みといえよう。(清水建美)

References

- Institute of Botany, Academia Sinica. 1975. *Iconographia Cormophytorum Sinicorum*, Tomus IV, p. 677. Sci. Pub., Beijing (In Chinese).
- KITAMURA, S. 1955. *Compositae Japonicae*, Memoirs of the College of Science, University of Kyoto, Series B, 22: 90-99.
- METCALFE, C. R. and CHALK, L. 1950. *Anatomy of the Dicotyledons*, Vol. II, p. 784. Clarendon Press, Oxford.
- NAMBA, T. 1988. *Tibetan Medicine and Materia Medica*, Studia Bonorum Materierum Medica, No. 2, p. 16. Research Institute for Wakan-Yaku (Oriental Medicines), Toyama Medical and Pharmaceutical University, Toyama.
- , TAKANO, A., KOMATSU, K. and MIKAGE, M. 1987. Pharmacognostical Studies on the Chinese Crude Drug "Pu gong ying" (I), The Plant Origin of "Pu gong ying" from Taiwan(I). *Shoyakugaku Zasshi* 41: 289-300 (In Japanese).
- , ——— and MIKAGE, M. 1987. Pharmacognostical Studies on the Chinese Crude Drug "Pu gong ying" (2), The Plant Origin of "Pu gong ying" from Taiwan(II). *Shoyakugaku Zasshi* 41: 301-307 (In Japanese).
- XIE, Z. W. 1984. *Zhong yao cai pin zhong lun shu*(中薬材品種論述), *Zhong-ce*(中冊), p. 365. Shanghai Scientific and Technological Publishers, Shanghai (In Chinese).
- Zhong hua ren min gong he guo wei sheng bu yao dian wei yuan hui (中華人民共和國衛生部藥典委員會). 1977. *Pharmacopoeia of People's Republic of China* (中華人民共和國藥典), p. 607. Ren min wei sheng Pub. Co., Beijing (In Chinese).

摘要

漢薬「蒲公英」は中国医学で婦人の急性乳腺炎や浮腫などの治療に用いられてきた。今回、我々は「蒲公英」の1原植物を明らかにする目的で、日本、中国、ネパール、台湾で採集した *Picris hieracioides* の3亜種、すなわち, subsp. *japonica*, subsp. *kaimaensis*, subsp. *morrisonensis* と中国雲南省の昆明市場で入手した商品を組織学的に比較検討した。

その結果、*P. hieracioides* subsp. *japonica* と *P. hieracioides* subsp. *kaimaensis* の茎および根の内部形態はよく似ているが、*P. hieracioides* subsp. *morrisonensis* のものは他の2亜種とは明確に異なることが明らかになった。また葉の表面視で観察される毛は、各亜種ごとに特徴的であった。

以上の結果を基に内部形態的特徴を比較検討した結果、昆明市場で入手した「蒲公英」は、*P. hieracioides* subsp. *japonica* の小型のものに合致し、本植物の全草に由来していることが明らかになった。

(Received November 25, 1991)

○岩槻邦男編 日本の野生植物 シダ 平凡社, 1992年2月4日発行。四六倍判, 本文311頁, カラー図版196頁。定価19500円。

平凡社発行の「日本の野生植物」の維管束植物シリーズの最後の一冊として「シダ」が出版された。著者は、つとにシダ植物研究者として世界的に著名な畏友の岩槻博士である。この本には体裁上今までの種子植物篇とは異なった特徴が2つある。1つは、冒頭34頁にわたり、シダ植物の総論的解説を含んでいることである。ここには、日本をはじめ世界各地の種数(日本には630種)や全39科の科ごとに世界と日本の種数が挙げられ(世界には10300種)、次いで生活環と無融合生殖の話、葉・茎・胞子のう群・鱗片や毛・胞子・前葉体の形、進化と系統の話から最後にシダの有用性や自然保護にまで言及している。なかでも、私にとって嬉しいのは新しい科の定義が2頁にわたる検索表で示されていることである。たとえば、環境庁の「植物目録」(1987)にはホウライシダもヒメウラボシ科もイワガネゼンマイもミズウラボシ科に含めてあるが、その理由や内容を知りたいものと思っていた。そうした疑問に本書は、検索表や解説を通して明快に答えてくれる。著者は、やや保守的な分類体系とは述べているが、タマシダはシノブ科、コバノイシガクマはイノモトソウ科、ヒメシダはオシダ科としてみつてしまった世代には、誠に目新しい。第2の特徴は、種名に中国名、したがって巻末に中国名の索引が登場したことである。シダ植物の国際貢献は、まずお隣りの中国からという配慮からであろう。

本文の解説は、種子植物篇同様の体裁で、各分類群の解説と検索表からなる。私は、しばしば、地方の植物誌編集等に関与することがあるが、実のところ、シダ植物に関しては、準拠すべき著作を何に求めるか困ることが多かった。いきおい科名をA, B, C順に並べたりすることになるのだが、この本を基準とすれば今後の著作が時代おくれになることはないだろう。

(清水建美)

教示いただいた新井房夫・宮地直道の各氏、放射性炭素年代の測定をしていただいた木越邦彦氏に感謝いたします。

引用文献

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫。1984。テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalogue—。古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」：865-928。同朋社出版、京都。

宮地直道・鈴木 茂。1986。富士山東麓、大沼藍沢湖成層のテフラ層序と花粉分析。第四紀研究 25：225-233。

田原 豊・中村 純。1977。千葉県における稲作の起源に関する花粉分析学的研究。「文部省科研費特定研究古文化財、稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究（中間報告）」：44-51。

辻 誠一郎・南木陸彦・小池裕子。1983。縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として—。第四紀研究 22：251-266。

——・——・小杉正人。1986。館林の池沼群と環境の変遷史。110 p。館林市教育委員会。

——・宮地直道・鈴木正章。1990。宮ノ前層中部層に挟在するテフラ。「お伊勢山遺跡の調査：第4部 弥生時代から平安時代」：15-19。早稲田大学。

(Received June 8, 1991)

○原松次（編）札幌の植物 目録と分布表 北海道大学図書刊行会（〒060 札幌市北区北9条西8丁目北海道大学内）、1992年5月25日発行。B5判、口絵カラー写真6頁+本文154頁。定価3914円。

北海道植物友の会の副会長を勤められる編者が札幌市の植物誌を出版された。本書は口絵のカラー写真頁に「きれいな花」「地名にちなんだ植物」「市街地に生き残った植物」「札幌にこんな植物が！」「近くの山、遠くの山の植物」「帰化植物の仲間たち」として代表的な種類を紹介し、本文はI. 札幌市とその周辺自然概況、II. 札幌の植物目録、III. 札幌の植物分布表の3部構成で続く。

本書の記述によれば、札幌の植物誌作成のために、調査班ができたのは1987年、以来今年までたかだか4年間の調査で総数132科558属1293種を確認し、コンピューターリストからなるII部の植物目録とIII部の1番の旭日岳から始まり53番の余市岳に及ぶ実に53個所の山別、場所別の目録にまで作り上げた熱意と努力には敬服せざるを得ない。まえがきには札幌には自然史研究の土壌がないと書かれてはいるが、この本をみているとその記述が疑わしく思えてくる。

(清水建美)

○藤原陸夫 秋田県植物目録 第3版 秋田植生研究会(010 秋田市中通6-6-36 秋田東高校内)、1991年5月20日発行。B5判165頁、非売品。

秋田市に在住される著者は、1972年に初版、1989年に第2版を出版しているが、今回は第3版となる。体裁は第2版と全く同じであるが、第2版が65頁であったのに比べ本書では倍以上となった。これは、今回は偶数頁を空白としたため、種類数が2倍以上になっているわけではない。事実、第2版ではシダ植物および種子植物が2084種記録されているのに対し、今回は2131種と47種がふえている。リストは学名・和名と3段階に分けた分布密度の記号(A, B, C)からなる。

全県1区をただ1人での植物目録づくりは、並大抵のことではない。日頃の研鑽と不断的努力がなければ、できる仕事ではなく、著者ならではの著作である。

(清水建美)

○小林禧樹 淡路島の植物誌 自然環境研究所(〒673 明石市大蔵谷清水583-36)、1992年5月20日発行。B5判、口絵カラー写真8図版+同白黒写真10図版+本文217頁。37巻2号。

以前に本誌で「西神戸の植物」を紹介したが、同じ著者が今度は「淡路島の植物誌」をまとめられた。内容は、1. 自然環境、2. 研究史、3. 植物相、4. 島嶼の植物、5. 植物調査一覧、6. 植物目録、7. 地名一覧、8. 文献といった構成になっている。目録によれば、淡路島のシダ植物は128、裸子植物は11、被子植物1140種を産し、その中で、ケイヌビワ・サイコクイカリソウ・キビヒトリシズカほか13種は、植物地理上注目される種、タカサゴキジノオ・エダウチホングウシダ・タマシダほか53種が淡路島を特徴づける植物として特別に解説がつけられている。たとえば、シロバナハンショウヅルは、1984年に標本による最初の記録を行ったこと、チョウジソウは兵庫県産地は淡路島だけになったこと、ホングウソウは淡路島がわが国唯一の多産地であったがみつけれなくなったことなど、種に応じた解説が読者を大いに楽しませてくれる。私は淡路島はマツバランの産地として印象深く覚えているが、マツバランは石川県と異りここではまだ健在のようである。このような地域の克明な調査や調査記録は、地球環境会議における生物の種多様性の保護という現代的な課題の基本になるものである。ブラジルの会議だけでは、地球の植物は守ることはできない。

(清水建美)

が、やはり足摺岬に見られることがわかった。室戸岬のように普通ではないが、常緑広葉樹林の縁に群生しているところがある。

引用文献

- 杉本順一. 1984. 静岡県植物誌. 814 pp. 第一法規.
高橋秀男. 1971. フォッサーマグナ要素の植物. 神奈川県立博物館調査研究報告 自然科学 第2号 63 pp. 神奈川県立博物館.
山中二男. 1989. 赤石山脈のヤマハハコ属. 植物地理・分類研究 37: 5-7.
——. 1990. 高等植物分布資料 (132). 植物研究雑誌 65: 192.
(〒780 高知市宝町11-6 Takaramachi 11-6, Kochi 780)

○ 大橋広好(訳) 第14回国際植物学会議(ベルリン1987年7~8月)で採択された国際植物命名規約 津村研究所(〒310-11 茨城県稲敷郡阿見町吉原3586)1992年1月10日発行。A5判, 214頁。定価2,500円。

昨今、国際交流や国際貢献がやかましく宣伝されるようになってきたが、植物学の世界では学名を知らず使わずでは交流も貢献もない。かつて、ある外国の植物分類学者から「日本では一体学名教育をやっているのか」となじられたことがあった。学名を理解し覚えるためには、何よりも命名規約を知らねばならぬ。私のところでも命名規約の演習などはやっていないが、それは、適当な訳書がなかったからである。理解に時間のかかる原書よりも正確な和訳書の方がはるかに能率的である。幸い、今回、「国際植物命名規約」の正書と付則I「雑種の学名」の完訳が出版された。私など、自動名の取り扱い方が分らず困っていたが、本書によって理解できた。学名など必要ないとの極論を時折きくが、生物の科学的相互理解の第一歩は、正しい学名の使用にある。この本の出版によって日本の植物学者の命名法の理解が一段と進むことを期待したい。来年は横浜で第15回国際植物科学会議が開かれるが、数日にわたって命名規約会議も開催される。恐らく、再来年には東京規約が発表される。私たちは東京規約の変更点は何か、注目しておかねばならない。(清水建美)

○ 池上義信(監修)・石沢 進(編集) 新潟県植物分布図集 第12集 植物同好じねんじょ会(〒947 新潟県小千谷市山寺 関省吾方), 1991年12月25日発行。A4判128頁。限定300部, 領価(〒別)3,000円。

1990年12月発行の11集に続き、正確に1年毎に本書12集が刊行された。11集同様の掲載種はヤマソテツほか3種のシダ植物, カマツカ・アズキナシほか13種の双子葉植物, ヤブカンゾウ・サギスケ・ワタスゲの単子葉植物, ミドリイヌエボウシゴケほか2種のコケ植物である。これで合計1050種の新潟県産の陸上植物の分布図詳図が完成したことになる。これらの分布図には、北信地方のデータも相当含まれているので、「長野県植物誌」のデータとしても使わせて頂くことにした。本書には分布図のほか、「新潟県植物分布資料(11)」, 石沢進氏の「離島の植物(11)」の論議も収められている。なお、1, 2集は品切れ, 3~11集はまだ在庫がある由である。(清水建美)

○ K. KYODA Catalog of Specimens, National Science Museum, Tokyo. Gramineae Panicoideae. Part I & Part II, 国立科学博物館, 1992年3月発行。A5判, 各141頁。非売品。

国立科学博物館植物研究部では、コンピュータを駆使して標本のデータベース作りや分布図作成の仕事が進められている。このほど、許田倉園氏によって博物館所蔵のイネ科標本のうち、キビ亜科の標本データが出力製本され関係者に配布された。第1部は種名のアルファベット順, 第2部は県別リストである。データの仕様は、コード化された学名(したがって、アルファベット順といっても、5桁の数字が上行式に並んだもの), 片假名表示の和名, TNS 標本番号, 県名, 地名(ローマ字と漢字)・採集年月日・採集者名である。こうしたデータが研究機関ごとにすべての分類群について出版されるか、遠隔地からのデータ検索ができることになれば、居ながらにして全国的な標本利用が可能になるだろう。ただし、標本の同定が同一の概念に基いて正しく行われていることが前提にあることはいうまでもない。私は、早速に長野県関係分のイネ科植物の全データを送って頂いた。(清水建美)

証拠標本

【兵庫県】〈神戸市〉北區藍那 (N. Fukuoka 9757, KYO・SHO・OSA; N. Kurosaki 9381, KYO・SHO; T. Kobayashi 19197, SHO)、六甲山 (T.K 865, SHO)、西區木津 (T.K 17986, 18631, SHO)、北區道場 (S. Hosomi 17670, KYO; T. Umehara 3485, OSA; T.K 18958, 19084, SHO) 〈西宮市〉武田尾 (T.K. 19596, SHO・KYO) 〈赤穂郡〉上郡町富満溪谷 (M. Kuribayashi 204, OSA; Fujii & Kuribayashi 2782, KYO; T. K 19061, SHO・KYO) 〈津名郡比淡町〉津名山地 (T.K 18778, 11055, SHO・KYO)、仁井 (T.K 19466, SHO・KYO)、釜ノ口 (T.K 18585, SHO)

【熊本県】八代郡泉村 (T. Tomita 1295, KYO)

【長崎県】肥前多良岳 (Z. Tashiro, KYO)

なお標本庫の略号は各々KYO (京大)、SHO (頌栄短大)、OSA (大阪市立自然史博物館) を示す。

文 献

福岡誠行・黒崎史平 1979. 藍那地区自然環境調査 種子植物. 兵庫自然保護協会鈴蘭台支部.

藤田 昇 1976. 日本産ギボウシ属. 植物分類地理, 27 (3-4): 66-96.

小林篤樹 1989. カンザシギボウシが淡路島にもあった. レポート日本の植物 No. 39: 193-194.

室井 綽 1983. カンザシギボウシ. 兵庫県大百科事典 (上) 607.

○ 北陸のヒナノシャクジョウ (里見信生) Nobuo SATOMI: New Locality of *Burmammia championii* in Hokuriku District.

本誌の前号に、鳥島昭信氏はヒナノシャクジョウを、石川県能美郡辰口町で採集したことを報じた。これは本種が、石川県内で始めて発見された記録であるばかりでなく、日本海側においても全く新しい。

ところが、小野ふみゑ氏は平成3年9月4日、石川県江沼郡山中町で採集された。石川県内で、奇しくも時を同じうして見出されたことは何とも因縁深いことである。

○ 愛知県緑化推進委員会編 あいちの名木 愛知県緑化推進委員会 (〒460 名古屋市中区三ノ丸3丁目1番2号愛知県農地林務部自然保護課内), 平成3年6月発行。A4判, 104頁。

県下の市・町・村から推薦された巨木・名木の中より104点を選び、一書にまとめられていて、それぞれの樹はカラー写真に、樹種・樹齢・樹高・幹周・所在地・所有者・来歴が記されている。

樹種別にみると、クスノキ19本が最も多く、スギ12本、クロマツ10本、シイノキ8本、ケヤキ6本、イチョウ・ムクノキ各5本、イブキ4本、クロガネモチ・タブノキ各3本、アベマキ・イチイガシ・カヤ・シダレザクラ・ナギ・ヤマザクラ各2本、イチイ・イヌマキ・エノキ・コウヤマキ・サワラ・シラカシ・センダン・ソテツ・ツクバネガシ・トチノキ・ハマセンダン・ヒノキ・フジ・ボダイジュ・ホルトノキ・ヤマモモ各1本であり、天然記念物指定では国指定8件 (名古屋城のカヤ・津島の大椋・神明社の大椎・杉本の貞観杉・甘泉寺の高野槇・木久保のナギ・御油の松並木・清田の大クス) の他、県指定10件、市指定14件、町指定26件・村指定4件が載録されている。

○ 湯浅保雄・松村きみ編 静岡県の巨木 静岡植物研究会 (〒422 静岡市大谷3800-70), 平成3年10月15日発行。A4判, 360頁。

本書は昭和63年度行なわれた全国巨樹・巨木林調査のデータ等を、パソコン等を駆使して、環境庁の報告書と別の視点からまとめたと言っている。内容の概略は最初に、153枚の写真と地図で、その容姿と所在地をしめし、つづいて静岡県の巨木の現状と特徴、太さベスト100、天然記念物について述べ、以下、市町村別・樹種別一覧表、調査担当者名簿、参考文献ならびに文献となっている。(里見信生)